

劇読み！ VOL. 5 上演作品

# 背德的ジャステイス

作 東京た

つみ

## 登場人物

金井清美 女詐欺師

小松純 清美の恋人

金井正 清美の弟

法月智広 刑事

荒川力也 ヤクザ

## 第一場 運命？

パーティー会場。

フォーマルな服装をした男女が数名、楽しみに会話をしている。

パーティー会場の中央で冴えない感じの男、小松純が一人立っている。

小松は周りの会話に入ろうとするが、どうにも気後れして会話に入ることが出来ないでいる。

パーティー会場に一際煌びやかな服装をした女、金井清美が現れる。

小松が清美を視認した瞬間、小松と清美以外の人間はいなくなり、そこは二人だけの世界に変わる。

小松 あの。

清美 はい。

小松 あ、あの。

清美 はい？

小松 すいません。

清美 え？

小松 いえ、その。

清美 大丈夫ですか？ なにか飲まれますか？

小松 いえ、大丈夫です。

清美 ふふふ（笑う）。

小松 え？  
清美 可愛い。  
小松 へえっ！？

二人、見つめ合う。

場面が変わり、清美と小松が様々な場所でデートしている模様が描かれる。  
場面は喫茶店へと変わり、清美と小松が向かい合って座っている。

清美 私、ずっとずっと雑貨屋さんをやるのが夢だったの。その夢が今日の前まで来てるの。私このチャンス逃したくない！

小松 わかった、明日、いや今日にでも清美の口座に入金しておくよ。

清美 これ、口座番号。(紙切れを渡す)

小松 わかった。(紙切れを受け取る)

清美 純さん。(手を握る)

小松 清美。(握り返す)

清美 本当にありがとう。

小松 君の夢のためなら。

小松、去っていく。

清美、小松の背中に手を振る。

場面は人気のない公園へと変わり、清美はそこでお札を数えている。

清美 ふふふ、ははは、あーはっはっはっははは！！

正の声 うるさいよ。何笑ってんだよ。

カジュアルな服装の男、金井正が現れる。

清美 これが笑わずにはいられないっしょ。五百万だよ、五百万。あいつあっさり五百万振り込んだ。

正 下品に笑うなよ。

清美 詐欺で儲けた金なんだから下品に笑ってなにが悪いのよ。

正 馬鹿じゃねえの。

清美 はい、あんたの分。(お金を渡す)

正 毎回なんで手渡しなんだよ？

清美 現金主義なの。

正 危険だろ。こうやって毎回手渡し。

清美 直接渡した方が、お金って感じするでしょ。

正 どういうこと？

清美 お金っていうのは直接渡した方が力があんのよ。振り込みだとお金が単なる数字になっちゃう。

正 意味わかんねえ。

清美 なんもつとわかりやすく言ってあげる。

正 何？

清美 あんた牛丼食べるでしょ？

正 まあ。

清美 券売機で食券買って店員に食券渡すのと注文して食べ終わった後店員に現金払うの、どっちがお金の重み感じる？

正 ん。

清美 ね？ わかったでしょ。  
正 いまいちピンとこないんだけど。  
清美 じゃあ次の仕事だけど。  
正 ねえちゃん。  
清美 何？  
正 俺この仕事辞めようと思う。  
清美 ……次は時計の見本品を——  
正 無視すんなよ。  
清美 だってめんどいんだもん、そのやり取り。  
正 めんどいつて。  
清美 毎回グチグチ言つて。  
正 いい加減足洗いたいんだよ。  
清美 無理だよ、もうどっぶり浸かってんだから。  
正 浸からせたのねえちゃんだろ！  
清美 あんた情報屋として腕いいんだから、足洗うなんてやめなつて。  
正 もうこれ以上嫌なんだよ。  
清美 大丈夫だつて、バレないバレない。  
正 そういう問題じゃないんだよ。ねえちゃんも辞めよう、こんなこと。  
清美 私は辞めない。  
正 ねえちゃん。  
清美 あんたが辞めても私は辞めない。  
正 どうして——  
清美 でも正直ねえちゃん現状あんたにすんごい助けられてるし、あんたがいなくなったらかなり危ないかも。  
正 脅しかよ。  
清美 脅しじゃないよ、でもいいの？ ねえちゃん捕まつて。 たった一人の身内が捕まつてもあんなたいいの？  
正 脅しじゃねえかよ。  
清美 脅しじゃないつて。でも現状、ねえちゃんのデッドオアアライブはあんたにかかっている。あんたがねえちゃんを救うのよ！  
正 ……汚ねえよ、いつも。で？ 何手伝えばいい？  
清美 ありがとう。んで、ちよつと時計をいくつか手配して欲しいんだけど——  
正 また結婚詐欺やるんじゃないの？  
清美 しばらくいいわ。  
正 なんて？  
清美 手間と時間がかかんのよ。それにストレス溜まるし。  
正 詐欺してんのにストレスつて。  
清美 詐欺だつて仕事なんだからストレス溜まるに決まってるでしょ。  
正 もしかして罪悪感？  
清美 そんなもん子宮に置いてきたつっくの。  
正 だよね。  
清美 ていうか好きでもない男と手繋いでデートして愛の言葉ささやくなんて、そりゃストレス溜まるつっくの。  
正 自分で進んでやってんだろ？  
清美 こうズーンってくだよね。身体全体に。肩とか腰っていうか身体全体に、ズンズンって。  
正 でもそれで五百万盗ったんだから別にいいだろ？  
清美 もらつたの。  
正 可愛そうに。

清美　なんで？  
正　なんで？　なんでって言った今？  
清美　言った、なんでって言った今。  
正　嘘だろ？  
清美　あんたの言ってることさっぱりなんだけど。  
正　あのさ——  
清美　説教とかいいよ、別に。あんたの常識とかどうでもいいから。  
正　ねえちゃん。  
清美　だいたい一時でもこの私と恋人気分が味わえたのよ？  
正　報酬って言いたいのかよ。  
清美　そうよ、ギブアンドテイク。だいたい今回のカモだつてロクなもんじゃなかったし。まあそういう意味じゃ詐欺に引っかけたって当然なのかもしれないけど。  
正　引っかけた方も悪いのかよ。  
清美　引つかかるに値するダメメンズだつたつてこと。  
正　そんなのさ——  
清美　だつてさ、いっつもイタリアンなんだよ！？  
正　はあ？  
清美　いつでもイタリアン！　映画見てイタリアン！　ショッピング行ってイタリアン！　ドライブ行ってイタリアン！　こっちは焼き肉食いたんだよ！　肉食わせる！　肉！  
正　たまたまだろ。  
清美　横浜行ってもイタリアンだよ！　中華でしょ！？　横浜行ったら Teppan で中華でしょ！？  
正　そんな怒るなよ。  
清美　とりあえず女にはイタリアン食わせとけみたいな？　薄っぺらいんだよ一事が万事。  
正　イタリアン一つでそんな——  
清美　花だつてそうだよ！　女が全員花貰つて喜ぶと思うなよ！　ぶっちゃけ邪魔なんだよ、移動中！  
正　ねえちゃんだけだろ。  
清美　換金出来ないし。  
正　そこだろ怒ってるの。  
清美　なんつーか考えが浅はかなんだよ、恋愛ノウハウ本に載つてそんなことばつかやっててさ、ベタっていうか定番ばつかで。個性とかオリジナリティがないんだよ。  
正　それじゃ駄目なのかよ。  
清美　愚問だね。個性がなかったらあいつじゃなくていいし、相手のこと考えてない時点で私じゃなくていいし。  
正　それはねえちゃんだつてそうだろ。  
清美　そう、あいつは私と一緒に。だからあいつも詐欺師みたいなもん。  
正　最低だな。  
清美　まあ、あいつも今回のでいい勉強になつただらう。五百万は授業料よ。  
正　勝手過ぎる。

小松が現れる。

小松　清美。

驚く清美と正。

清美　……純さん。  
小松　その人は？

清美 へっ？ あ、弟よ。  
小松 弟……。  
正 どうも……。  
小松 ……。  
清美 あのね純さん——  
小松 良かった。  
二人 ？  
小松 心配したんだよ、急にいなくなっちゃうから。  
清美 ああ。  
小松 家行ってもいないし、携帯も通じないからなにか事件に巻き込まれたのかと思っただよ。ずっとなんか探してたんだ。ずっとなんか探してたんだから。  
清美 ごめん。  
小松 もう二度とこんなことしたら許さないからね。  
清美 うん、ごめん。  
小松 でも良かった。無事で。本当良かった。  
清美 純さん。  
小松 あっ！（正に）あの、初めまして、今、清美さんと交際させていただいてる小松純と申します。先程は弟さんとは知らず無礼な質問をしてしまって申し訳ありませんでした。  
正 いえ。  
小松 清美さんとはゆくゆくは結婚を考えていますので。  
正 結婚ですか？  
小松 はい。  
正 そうですか。  
小松 よろしくお願いします。  
正 こちらこそ……。  
小松 それでなにがあったの？  
清美 ？  
小松 ここ数日どうしてたの？  
清美 えっと、あの、実はね……。  
小松 うん？  
清美 親が倒れたの。  
小松 え！？  
清美 なんとか一命は取り留めたんだけど、一時は昏睡状態にまでなってる。そうだったんだ。  
清美 そのことでずっと頭がいつぱいで、ごめんなさい。  
小松 そんな、こっちこそごめん。  
清美 今もそのことで弟と話していたの。  
小松 大変だったね。  
清美 ううん。  
小松 なんて病院？  
清美 え？  
小松 お見舞いに行かせて欲しいんだけど。  
清美 ありがとう。でも今はちよっと。  
小松 どうして？  
清美 今の状態を身内以外にはちよっと見せたくないの。  
小松 そうなんだ。  
清美 ごめんね。

小松 携帯はどうしたの？  
清美 ん？  
小松 清美の携帯、現在使われてないってなってるけど？  
清美 それは……。

背広姿の男、法月智広が現れる。

法月 お話中しません。

小松 はい？

法月 金井清美さんですね。

清美 はい。

法月 私、新宿警察署の法月と言います。（警察手帳を見せてしまう）  
清美 ……。

法月 ある事件に関して少しお話を聞きたいんですが、暑までご同行願えませんか？

清美 それは。

法月 たいしたことはありません。二、三お話聞くだけですから。

清美 でも。

法月 なにか不都合でも？

清美 いえ、そういうわけじゃないんですが。

法月 じゃあ是非お願いしますよ。

小松 ちよつといいですか？

法月 あなたは？

小松 彼女の恋人です。

法月 恋人ですか……そうですか、それで？

小松 なんて彼女が警察に行かなきゃいけないんですか？

法月 実は今都内で発生している連続詐欺事件の捜査をしまして、その件でちよつと彼女にお話

聞きたいんですよ。

小松 ちよつとつて、なんだか彼女を疑ってるように見えるんですが。

法月 そんなことないですよ。

小松 これってあくまで任意の事情聴取ですよ？

法月 はい。

小松 任意なんですよね？（清美に）だったら行かなくていいよ。

法月 是非とも協力頂きたいんですがね。

小松 行かなくていいから。

法月 何故そんなに強情に言われるんですか？

小松 彼女はなにもしてないから。

法月 なにもしてないなら警察に来たって問題ないですよ？

小松 その言い方は絶対疑ってますよね？

法月 そんなことないですよ。

小松 だいたいあなた本当に警察官なんですか？

法月 （鼻で笑い）警察手帳見せたでしょう？ もう一度見せましょうか？

小松 警察官って普通二人で動きますよね？

法月 詳しいですね。

小松 一人で一人なんです？

法月 置いてきました。

小松 はあ？

法月 一緒に捜査してるのがペーペーの若造なんです、これがクソ使えない上にクソ生意気なも

んでね、適当に撒いて来たんです。

小松 警察官が警察官撒くなんてありえないでしょう。  
法月 そんなことはありませんよ。  
小松 信用出来ません。(清美に)絶対行かなくていいから。  
法月 おかしな人ですね。  
小松 なにがです？  
法月 何故そんなに私のことを疑い、彼女のことをそんなに信じるんです？  
小松 はあ？ あなた何を言ってるんですか？  
法月 別に、単純に疑問に思っただけですよ。  
小松 疑問に思うだなんて、あなたおかしいですよ。自分の恋人と初対面の不躰な男とどっち信じるってそんなの恋人に決まってるでしょう。だいたい自分の恋人を信じないで、誰を信じるんですか？  
法月 本当に愛してらっしゃるんですね。(鼻で笑う)  
小松 なにおかしいんだ？  
法月 別に。  
小松 あんたいい加減にしろよ。  
法月 わかりました、今日のところは失礼しますよ。  
小松 さっさと帰ってくれ。  
法月 あゝ一応お名前お聞きしてもいいですか？  
小松 小松純だ。  
法月 そうですか、あなたにもお話聞かかもしれませんから、その時はよろしくお願いしますね。  
小松 なんだよそれ？  
法月 (清美に)それではまた、近いうちに。

法月、去っていく。

清美 正。  
正 ああ。

正、去っていく。

小松 どうしたの？  
清美 ううん、ちよっと頼みごと。ありがとうね純さん。  
小松 ああいうのはきちんと言わないと。  
清美 私、怖かった。  
小松 大丈夫、僕が絶対守るから。  
清美 本当に？  
小松 ああ！  
清美 純さん。  
小松 何？  
清美 大事なお話があるの。

清美、小松の手を取りじっと見つめる。